

サビエル生誕五百年



巡礼の道

178

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

再びアンコールへ

即決したもう一つの理由は来年の年賀状は

七月末、リハビリ中の妻を残してカンボジアを支援する「バッターバン友の会」のスタディ・ツアーでカンボジアを訪れた。

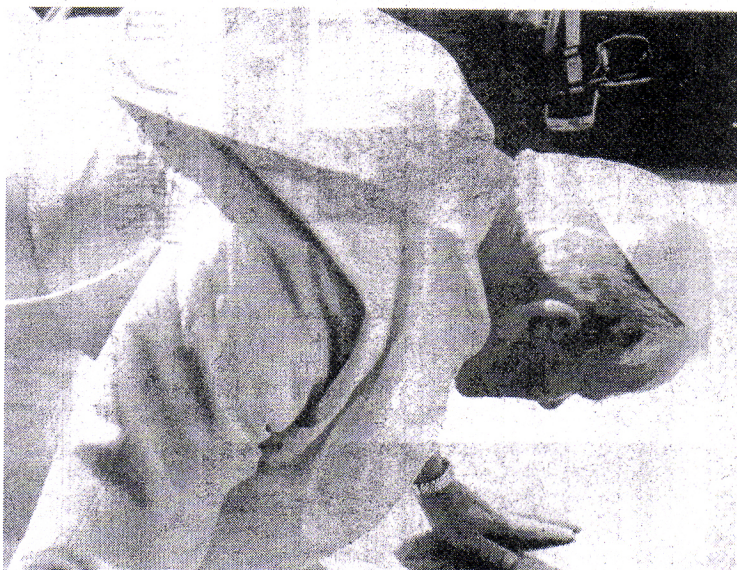
のだから驚く。二百五十年の沈黙の中から長崎の隠れキリシタンが発見されたこととオーバードラップして心が躍る。

このアンコール遺跡はぜひ妻にも、と思っていたら、意外にもその機会が早く訪れた。新聞折り込み広告の「宇部空港からチャーター便で行くアンコール遺跡めぐり五日間」が目に入ったのだ。

あれだけの文化遺産がフランス人のアンリ・ムオが一八六〇年に発見するまで密林の中にひっそりと何百年も眠り続けていたという

泊。これなら妻の負担も少ない。

大地に口づけするヨハネ・パウロ二世



アンコール・ワットを背景にしたものにしようと思ったからだ。しかし、遺跡は凸凹が多く、いすにもなる手押し車を用意したが役に立つかどうか。若干の不安を持ちながら十一月三日に出発したが無事に帰国した。多くの人に助けられて、その点は良かったが、あまりに多くの人

が団体で旅することに疑問が残った。今回は百八十人乗りの飛行機を三つの旅行者で借り切った形で大人の修学旅行、いや高齢者の修学旅行の感じがした。



最も古いロリュオス遺跡で

2009.11.06

一人々々にそんなつもりはないが、日本の団体様のお通りで、赤信号、みんなで渡れば怖くないといった具合で、何か他国を旅するという意識に欠けている。何に問題があるのかと考えた時、あの光景を思い出した。ヨハネ・パウロ二世が来日された時、タラップを降りてひざまづき、日本の大地に口づけされた。これは日本への敬意を表したものであろう。

もちろん我々がそんなことをする必要はないが、訪れた国に敬意を持つことは必要なのではないだろうか。ちよつと大きになつたが、旅をさせてもらう謙虚さが少しはあつたらと感じた。

「そういうあなたはどうか敬意を表している？」と言われると困るが、巡礼記を書いている手前、事前に訪れる国の歴史や文化を調べるし、思い出にその国の小さな国旗を買い求めることにしている。今回のスタディ・ツアーと今回の観光ツアーでは性格が違うが、訪れる国への敬意、旅をさせてもらうという気持ち、自分自身の旅をより豊かなものにしてくれるような気がする。（元山口放送取締役ラジオ局長）